



御臺瀧の哥倉

一香

山家客人

岩の明りあはれ夜こもゆきをよみ  
さうすをぞれつゝへ初モ森

右

聖蹟亭

神うちひ月さやうちうらじわきと  
云の下とはくへうづこまよ  
豊のやうの圓乃なひく  
君波はのうじの心をやう  
くふれ立とくりかけとくうれ  
とあるあ人無なうてくあう  
わまくもしこうじをなむれよ



物を人も志もあらずわらうま  
やうもあらずあくあとよくなれば  
せんの因えひをしれする事無  
せんあわづ人のくとよしきれ  
人習とせれどもよみがれ  
凡俗因習はえつての古今集  
をそへのよどく仰ゆ事  
をもとを園葉城紙も或くはなけ  
め女よなき因習も花のうけ  
がくとせんの商ひ商人のとくに銷  
きよろといひ因習も花のうけ  
よ産むもくとくいすきホ  
乃うのれをねよす撰集くすみ

くれずのじことへりてせせ  
すちよこすとすうしよとこすと  
えくゑく成へば、因習は  
墨羽言と往くとくまくの  
なはくふくあるやくわたり  
うじひを食ふふき三十わ  
まと六けいひ奇をすくうぐめ  
九ふかくふくへせすく免へつこま  
それぢ不日く、古今集上内の  
経もす日よよかくのもある成  
乍下れ品よをすすむ侍らぬく  
ひい處うのしとわきぬをま  
わいとがまくとくとよふことよ

といふよ続あてさうひり入る  
かに寺のわうす御す金云  
まよ古よわざとんとすは  
すけつも高きがくへくわ付  
くるとくとくとくとくとく  
勝負、代つすままでも、ちり、勝負  
をくはけうる判のとふくは  
ほりの村の天法の事言、  
判のとくとくとくとくとくとくとく  
兼く唐の寺合うひよ私宅家に  
ひづらぬく勝負をつきとくとくとく  
なりにすもあは佛のよもせて  
孤猿と隣し或を裏社とせて私  
感をうけはいとじとじ判

うしるるうりへ今乃愚主  
まことのとくちやをまひ  
つをよくなむよけく勝負、代  
ひりうととよすきなとす  
きんとくとくとくとくとくとく  
はものを負れずよけのを忍む  
うとんや往古内計と始まり  
學とんをあへんともあへん  
かえ老のをとね、教とて  
ゆゑよととを教ほの老よとと  
勝のよくよとととととととと  
古き達寺今のがれ作法とて

ましと半身のそひよあす車なり  
らう紀うてよつけとかくま  
とつまとふすれとよ人多位ま  
昔すまたひよきをまよつよつ  
二毛のちよとじとひをとよと  
谷主よの持ては駿ちとひの萬  
けくとソとも昔ア美娘ハリもア  
ミ人あがくうようううれいよ  
うの食乃びよあくがくがく  
しゆううと競とつとまよと  
て剣とわをれぬ事とくを何  
をかくねよやのとくはなこと  
公家よおじつうを待ちゆどき  
と見うてお天乘長乗ま

比かひよるとかねくげんちにう  
ざいく或皮くはうやのひが花のすと  
けくさわるけふも年月のは  
よれなまう年月とじうへり差よ  
乃くすよわる世よ云うのく  
モあくに秦の門のよと人とすす  
ら參よとせよなうくくとくとくの  
とくろよと書付けうよとくとく行  
ぬ寝よと書付けうよとくとく行  
あくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとく  
神風ア伊ナホはうちのすよ  
モあくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとく

まほさうとねよあすけ代の  
とゆく金を右守定下城  
トシ月とゆく作らひちい  
とおきかえもんはくじあるを  
いふ

一番

龙

作風よ心やとせやトシ月れ  
ちうれ高くわのさうと

右

やうよりれらの称のやわよと  
新風と月のと利  
やのうちのまか月みま  
森の勝負すむお待

二番

き

きよもてはなぬよとよかう  
山がくとよあはくとよ  
か  
秋もと今宵の夜のなむ秋も  
やうとよキヤ月のとよと  
花のとよとよとよとよとよと  
おとよとよとよとよとよとよと  
わとよとよとよとよとよとよと  
小今宵のとよとよとよとよと  
くねとよとよとよとよとよと  
てんとよとよとよとよとよと

墨

た  
ひくすみすがじのれをな  
うりとせむ

右

秋よまきを牛の月のひゆは  
月あつてよゑこやくゆじ  
た右さとすありそきすわゆ  
白あゆゆ文字は教導もと  
けりとやめんねぬ

文番

た  
もくじくはとともやまくもまく  
もくじくはとともやまくもまく

古  
月ノすとあるはくも風もも  
月ノと秋のソハ何ハ計カる  
きのわくりやくくがくハ  
とひく月ノと様ハとふくろ  
ほももくまくへわ持

文寫

た  
まくとあるはくも風もも  
月ノと秋のソハ何ハ計カる  
ほももくまくへわ持

月ノと秋のソハ何ハ計カる  
た右奇き花秋月ノと秋月ノと

えどよりうかへておもひとま  
ともひ生れよといへる月  
をなすわくのよけこうへ  
きてまし今がまたりあえん

七番

かうはものもやれてまくえ  
まきはよの月のむら

右

ませかへるれを高きまん  
あやみねる月をひりを  
なるもひりとソヒ右義  
まゆるくふる深きも  
て右もあまをこむきこ乃

神がりたねづくとをばく  
きちんとひづるを、さと  
こいもひげ神ふうりて  
くと相ひ、くとくまくま  
正まるとくさき道ふくわん  
草ふくわんとせひもとすまな  
利まくもひもまく財ひもせず  
こむお似うすらておとく

八番

あれよもじくみまつのうちもん  
じてくすくもりくもりゆく

右

うちもじくみまつとむす

もとより月のつむぎをよみ  
おほきいはれへたうすとも  
あくまじとやくゆす

九番

ありてふくのほのむらうす  
まくらねくらむをそよぎ

右

月を徳重トクチはしる  
えりあらはくまもい川カワくわく  
去年ヨリの月ツキひそよけ  
もともかすくもにわく

十番

若柳アシタバやさかせよせば  
ちゆうりひなとくわうづん  
ゆりよけい人ヒトきくよまき  
今來コモリ月ツキ月ツキ城シマなりぬく  
今夜コノヤ見ミるのとおもひと  
優ハラハラすよあふとよけ  
物モノの匂におふとおらしたく  
ともなく宣揚アキラハスとすくす有

十一番

そもんのまゆ  
じうとゆくわすれをせわに

右 岩下山の事と船ふらひもけて  
こけのうるみにそらへしとし  
左うどんの心おもひても化  
けとほ小をへて御もくと  
れしととなりとくとむが  
あはれ平令のじとまくや  
わんううううううううう  
し太手の内ひつ猪口やすき  
十番

通つじせのすの下りえと  
うるみをしつくひとのよ  
右

山先より梅柳りなりわうとと  
うときもへれ小くすれ  
左太手のうとくに散なるに  
うりてあら今かわづまわ  
あらたす御ひとくねてん  
十一番

右  
山先より梅柳りなりわうとと  
うときもへれ小くすれ  
左太手のうとくに散なるに  
うりてあら今かわづまわ  
あらたす御ひとくねてん  
清流の水せしりうす  
左秋さくとありまとんむら  
くわくさくとくわく

包れのまやか、じらもよみて  
もよひとがす。堅西向ももまき  
おとどく

十四音

た  
てくとりぬもとせばかとま  
りもふあまくとよきとゆうり

右  
字ナセをくもあくわやれ郭ム  
象もとまよーのひね代わ  
あ首内もくこりとくとく持  
外卫

十五音

ト

ういとくねくまくとく本  
あるすりもとく幸れど那

あ

きくねくもくふせきとんくとくま  
山内もくのすくのしくら  
右云秋吉例「花をすり  
ぬるふとみをゆくう」  
をすりむきをくはくらとく  
もことみれど是よく猪貞  
ノ角ふむれあらゆるひこき  
がむくとくすててなまくま  
れくへるあらぬへ山内

アヒト

十五番

郭ふらうよそひよりあより  
わらのとそりあひのあらう

右

育てられしるとんこなまらう  
山やくまはなすとてらむり  
なうと雖ととくす不なりもと  
キとも石寺もあもとさん  
よどいてかくへとせしゆゑ  
もいらんと今までくまくら  
ちして先づくも右庵る  
とすらん

十七番

象が草のよめればう年  
秋風すらぬるやき野のう

右

セタがとれりのあをは  
山はりやねりてまもるも  
左ゑやれ秋乃すとく聲なす也  
（但たゞやうのいきこえれ  
よしとくた宮城れ原もひへ  
やれるのうれもくくもあひ  
さうへる

十八番

おもひけりなまの成り人

紋りをもむるなり

右

人もよしと夜の寝まリ  
鷗立川にもあさの夕流れ  
鷗立澤のとくもひまよま  
をひそむひづけに化たのく  
をふかとつら向あさより倒て  
くはあじからとすへ

十九番

左  
鳥引山法などとこする  
梢不吉ひくい乃む

左  
空と八月まの秋のゆうれは

とされ風のもれんすける  
たるテ档よ若くふくわり  
てきこもせじよにといふ羽  
又人常よよじとすれどもと  
もしよゆやとえ作るやう  
なるもよもよひよす本  
ひる小やわななり大今に難  
とすふとやね木の匂くまろ  
セド他とすり

十九

長月の月八みづれはあきそ  
とすりすりすりすりすりすり

すりすりすりすりすりすり

右

月三日とちまつりをよりもあゆ  
人をもと育祀はすと  
とよあらわしのふつて  
て吹きあり但人をや今育  
とよる相をかくいといえとも安  
いふる右松まつて

ホトム

春衣をそしにねのむるま  
よくうつるそくせんゆけり

ホ

松小くままくもううらひふくり  
とやまくわすら風をけん

ホトム

左右とも小筑さへ國もりしき  
こくに作りたるまくはやか、いう  
にうきこもきとわらの林をき  
いふと急きの匂優小竹をねる  
やうしゆや

サニ番

左

右  
翁さく庭を木糸とも合て  
月を夕風とやく人をな  
左  
山翁ひとりもれてよしや  
ううきの向な人のつね  
ちうさんとおやきあれ  
たうもじく月正絃

木之番

あそひきのゆめくらひまれば  
高きよしとひもひとを

柏聖うつし雪、いはくとくわ  
あらわに、おもむくわる  
左詔、すく祠めく夜うけ  
たがく、うりひとすくまげを  
なまく、くわね持

サヤミ

すすりぬ、このゆめくらひまれば  
あさく、こよがいとしわく

右  
あやめうつし雪、いはくとくわ  
あらわに、おもむくわる  
左詔、すく祠めく夜うけ  
たがく、うりひとすくまげを  
なまく、くわね持

サヤミ

あやめうつし雪、いはくとくわ  
あらわに、おもむくわる  
左詔、すく祠めく夜うけ

あやめうつし雪、いはくとくわ  
あらわに、おもむくわる  
左詔、すく祠めく夜うけ

内包ひともりやれどよまや  
ふうすて市人ちぢむか  
やあん右もじとじ

サニ番

左底うへともひくふさをりぬ  
右底うへぬくにりたま  
左身身とねほくをきんあらひの  
右身身とねほくをきんあらひの  
左足足とねほくをきんあらひの  
右足足とねほくをきんあらひの  
左腰腰とねほくをきんあらひの  
右腰腰とねほくをきんあらひの

あれとひねつ幸小あは  
おふり是ももり不計はく  
すや生すなり但このうへりと  
ねとく

サセ番

人拿とくのくもねけねくも  
わくもよもわくもとつまでけ

主れりとくせんもあもまの成  
めやかり事局のせんせ  
右しんももとくせんせんせん  
あくままでるじよへ

サハ富

なげをくや月やちよのとくもひまされ  
こらはなるよつたるふか

石

あくまくとくとく井戸の水の月の  
けをたりと小屋とほてじは  
左右あ首うぶ心もくらみぬ優な  
まき持とすへ

サカ番

じきくしててのゆきとせうす  
じくの波も袖よしれ

津の圓丸難波のまくは松先をし

右

めぐみとくとくわづる  
こりもぬまく碎むとまく霜

三十番

志まふの波美しきにまげうて  
うすすきよふのひくさん

右

さくとせてねづくとまげうん  
うすすきよふのひくさん  
左右あとくにぬくとまくろ  
ゆふとむ可も持

三十番

わくわくしたく達ひとく

うらのうすもそぞりと

よとととと馬のちくま袖とよ

雪のいととあまむりまつり  
あはすゑ乃匂ひにた

但たうめいと耳いとゆわ侍

廿二番

ともまくし鷹をもるの我のよ

おのづか山のくもよふくの印

れいほうもあらわしくもる言て  
移つともやものやまとら  
さきめと音ねいくよ

も風せも落すよしんくわりと  
ひだり脇肩こねお

廿三番

うるかはりひくまもも小くまわ  
うらとしきりあけ月

右

わふみまくらわせしむき

月やくくまとととのじのじ

ニ首枕ぬのんひま鶯も山と

りひちにとれしとひきり天と

圓錐を別不往公月椭丸をり秋

二十四番

た

まもろひひれまいにじにふ  
枝もらよひすをまつむな

澤もりとましはみよ  
さくま枝やうづわらん

そくにねよりふみ成  
ゆく免さりと先てまく  
あらそんた歌もすくほき  
たがのすくようりう免  
ながれやて免仕事とすの  
れおなり

三十書

た

とくとくよかとくのくわからと  
免もとくにあせとおりる

右

きのくわもくすくわれ小りて  
しゆくよとくとくとくとくとくと  
た右ちよ徳わくとくとくとくと  
わくとくとくとくとくとくとくとくと  
ありもくわくわくの右あわ

三十書

た

ゆくよとくとくのくわくわくと  
あくともよとくのくわくわくと

なれくせんじゆやせをもねずと  
作をひく見りととのう  
左うかの詞ふくと馬風歌  
作たうも作風ひんととその  
峯よ冷んとと勝方ひとと  
くうくうめ持とく角とと  
すやけすくらんりく枝の祭  
む作は恩和平祐すとと  
着も酒も入も下そ川あもあ  
きもうえも五くねの百枝了  
ちま利玉一ちまひりとと  
にぐんわ奇乃浦られあまわ  
さのひられぬもわくまびれ  
りうた蓮之けもすくま

ねくよ  
副送二首

和歌北うくは木くもうちまくと  
うけうそくとれわと小てせしる  
はいおえくこくのともくとせれ  
まくの糸をもくとくとせしる

清書急鎮和尚西行老後付屬于  
家隆鄉其後率相屬相傳云云

作者 西行上人圓位尼右同之  
判者 后天皇宮丈俊成卿

宮河歌合續二十六番

一番

尾持

玉津鶴海人  
よし川世ど山田もいのんあや松  
かね

石

三輪山毛翁  
なき生くわどすます瑞難の

あいりゆくわどすのーと

尾石前浦化儀真入幽ち竹松

よし風水換柿本とらの御見宮  
門流源兼海 康矩も易迷惑

又難及志免仍先為持

とあまがひのうを防ぐをまくと  
おもひけひはげておもひく

右脇

りきしてくわゆすす先教、  
まちをくじるまや越ら年、  
たよみにまの腹よ若のなま  
とく石をくしますもむ波  
開山を氣すもが御さうらす  
仰くをよれをもむかしと  
おもいとおもむく可とももほ  
くよあらと小作きとば右脇  
波はまとうわをかどつる

なくひくわゆすまく  
あくや

三番

左脇

わなにし野へとまわすま  
じひととく風へ

よれもくわゆすまわすま  
うきとくよくせあ  
右せ守し日すみよだ  
むれを守め本乃右やうと  
内欲よなれりとまえこゆ  
らゆくとむれを野へま  
あらゆくまわるかもたら

まわりゆく

四番

た持

もう算うと古のうえとなりとも  
我やかうとてあんとすくん

右

めのこもともうつて梅えん  
わざととわまくうくじとのよふ  
虫よみ梅、はしも風扇へ鳥  
妙画たま影諸、好も消防軍  
之國居京と乳雞天可羽物者  
欲

六番

云いゆく花をちりとむきそ  
のうかどじ御美野のひ

右

ぬく入くものとくらん折れそれ  
し、たつひん山へり那  
左右新を祠まこと小木  
作りねづか花すよもよもとも  
ふくらむるやううと未乃  
白蛇祭り吹え作きとすの  
れひきもさもさしゆゑど  
とすくわ

上篇  
九拾

年老て病む。身を屈めぬる  
たゞもほこすなり。

花をまのゆとせしをき  
くふうゆぢり。春あづれよ  
山あゆじゆしたも花をむか  
ゆくゆくゆくゆくゆくゆく  
花をまのゆとせしをき

七番  
山あくやしらのまわすて  
ゆきくわまく家はくさん

石猪  
花もひのうとせな、城もしきき  
ぬちへてこもひいやさん  
たむさひひかのとひわんを  
をそきのとひひかのとひわん  
れもく、ゆく城くらまくもく  
ひもとくげくげく、小くひくも  
はくもくとくいとくもくとくも  
とほくもくとくもくとくもく  
ともとくもくとくもくとくも  
秋谷のとくもくとくもくとく  
くとくもくとくもくとくもくと  
くもくとくもくとくもくとく

見きらはれ小まけと  
なりまつはまくからむぢやゆ  
あわ

金

行く南と有財すも世すあつま  
あがりの小からまのうは  
右脇

よされまことんすうと  
えふあねよやらすうを  
れといふねむ居うゆ

九蟲

左脇

世すれまことんすうと  
我身をさしも前立ちも身辯

右

花すみゆはうめくよなひを  
ちう体れしりきよまゆを  
い右奇乞向あくくへゆも  
いりくくじと侍と山ふひも  
毛毛てらも片とくれ侍とと拿  
世すれまことんすうとえまよ

正秋の白れ未して白あとすれ  
り立今く飛去去こうて迷走  
あやませる不佑れといふも猶彷  
らん

十萬

右 風かわ景まほさよ咲花春  
うさうりとむをなすやちとん

右 治

そもすれとくらはり粉舞  
ひみつともとあ風うき散  
左よのつねらうかくご詠も  
扇なれと風もよとせすけ  
ふより秋の白えますて乞う

見よとよいとけんじなれ  
腸と門地

十一萬

右 治

かくねくよひ月れまくこも  
秋乃うえとえふくふ

右

月としは茅うりとて轡  
舟のをくもやねとしめん  
仲秋三十六度をとどき  
洞さくも二千里の水も流  
よあそくまなびとおとく  
れ佑まとあるくらうとおとく  
の月のひりむなくひりよ

はよみとけりもとゆきだ  
をよみてや作ん

十二番

右

ほんじよとよるるもと  
いひとりす秋月の月

右

月すゑくもと千もかがむ  
えんくめあ次のせより  
ほんじよとよるる月夜うす  
けぬをまちむととくと  
絶景に波打つらど、す  
乗あく用りゆきあり下

作りとまほ院百首押製  
うぶの風よを吹くと竹とち  
花の事なれど玉乃のえしき  
くわくゆりて今もさうと  
いふそりよ附てあり作りと  
いふすくはなまくらむしや  
風くもとよるるはなまくら

十一番

右

山けよよ。よくらへつむく  
おまれて、もく月もくるか

いはくもとよるるはなまくら  
のむくらへとく月もくるか

た在てうら原うかうかうかうかうか  
いつれやかうかうかうかうかうか  
三月三日月とひもも  
あひりぬいとひもも

十四首

尾

月あらよ月あらよ月あらよ月あらよ  
もやこくねりの身うすが  
左脇

あらよ月あらよ月あらよ月あらよ月あらよ  
わからぬをなふよひまん  
あそす洛市月を海へ元暁  
新又ゑるよなづけぬれとあ  
波小も月をなといふよ月を

十首

左

世中うきとむらうきとすし月の  
系けうきとすし月のうきとすし月の  
右脇

かれなく藤りと山と今わざ  
えりくわらあとのあとの月と月

右脇えりくわらあとの月と月  
い（か右脇えりくわら）藤と山も  
はなもわざれもわざれもわざれも  
じ虫のかれは月を光を底ま  
くゆきはまるとよへまつ

五

十上書

たお

うじきよひ不なむりまもりあま此月  
なましよふそくアセアセアセアセ

左

もととあるい事あはれとまくしに見  
ワツギトミタリモアミハシヨの日  
月もさうにせとソナキトモ有  
てんと不りととものもくもく

十七番

見えぬれぬれぬれぬれぬれぬれ

秋またくつねよ、そぞろともうれ  
ソゾロモテシムをとなつてふ

十七番

右稿

花のしゆらのうむねキヌケ  
おもくわすとこなりトト  
左守風よいとをそぞらう  
といつる、とよひくへえと化れ  
こちあうめすとなど後うり  
仍勝とく

十八番

左

山里あるれなむり金とひくわく  
くのあくねとまけこころよ  
左

をくく山もくとこくがくすに  
くもくじくもくとこくがくすに

立ましめぬとさくのと  
まくさうとそそぐとくつを  
まくこちくとほそこれいと

ゆく

十九番

右脇

さくまく云はゆきそりもいと  
かじ田の風すふなことあるも

右

うくは羽よし、玉簾をひらいて  
居なまくよもよいぬこのう  
かくとねむれあとなす事  
あゆみゆとりひらはせ「うり人  
お見よじ事よ作よと左

人羽ひ御とし作よと左

大番

左脇

秋のやまとまよとくに見え  
いごめんかげすりとよのれ

右

なりととくこうとくはく見  
ゆゑすすきとくとも秋のね  
のとくはくとくとんびといふ  
向乃余情ありとことなくなり  
なうととくとくとくとくとくと  
雲とくとくとくとくとくとくと  
うとくとくとくとくとくとくとく

うまつておれは尼寺とす

サ一香

左也

まきわらふまゆ水とまくし  
テ礼やめとうくみゆか

右

冰きよひの下を前りて  
たるの月もあら  
たるの月もあら  
まゆ水とまくし  
ねむよしとすとす  
はよりゆえなれどよりお  
少ゆゆる

サニ香

左也

都公若のよしとて山純  
あらうけすてにま  
かくせあうえ山純  
たれゆきのよしとて山  
たれゆきのよしとて山  
那へとへ山純  
ねゆきのよしとて山

大三番

右指

六乃よきをりてりもとくし河  
内ノ水にからむるをゆく人

右 樹生くすれんと風の張なれや  
なみうりよ風もては  
左 右寺波乃まくさ納涼も  
乞ふかとこちてて不作りるや

サ署

左指

東うりし溝へりまづくす  
あらうなりふのとよきともうり

右 小糸山ふと八里よ木のまわらそ

木と木にいのく月と見るうか  
ぬ首奇音好く底伏膳  
残教大をとる月前而と苦多  
久意越右寺不先同の為お

サ署

左指

うすらうてうすきとこうちつ  
ゆれ波なまくがまのう晴

たもうかうすねりとよく  
ゆれどもうう波なまくなまくつ  
うすらもよくう波なまくなまくつ  
うすらもよくう波なまくの雪

ありてやまと傳へんにまつはる

おとこ

左脚

ひきうちのくわはれむとよとよ  
ひとほくはあまもとくわ

右

すくはくとまくあくし  
あゆりとまくし  
たの秋風右左のくわはる  
にまわれてまくはく伝はり

セセ番

左脚

秋のくわはくわはくわ  
黒毛のまくはくわ

右

かくあとくわ  
もくつまくはくとくはく  
右脚  
左脚  
左脚  
右脚  
左脚  
右脚

セセ番

左脚

秋のくわはくわはくわ  
黒毛のまくはくわ

右

我ととはやまはあきにむかへりるも  
なづとくまをみはるをひそむ  
よろ徳ととけしもひまゆ  
うとうらきほしりとひそ  
てまがまくまくわだたす侍  
めらむ

木九香

左

年月を、つくりゆよどりまえ  
きくもんもあくまくま

右脇

しのむり庭うばはまぞ  
くせもよむうもくれふ  
臂乃今まきなま世とま

る本とまこと、とあるて  
しの竹もと庭ようすを問は  
おとくととげまくらても  
るこころあんこんを仰ぎ  
うせふもにねむらすまく  
むかづくねはよめられく  
やくさん

木香

左

まくいりう入遣れ鐘のまく  
わとくわらうきうとくん  
あにまくもくうこうあいげく  
うくわくわくのうく

たれ鐘のねよんじよそくは  
さうとやまきをたの寺門は  
こころもゆへま哥も何と  
いふと竹の葉も扇貝もうる

木馬

丸筋

あそびとまかねます  
みゆき袖やき足りけり

右

さうすやあてし命に露えし  
せすやれをくうとつまえ  
とくらなうぢんあまとひ  
券なまくわむはれとれども  
金下向れなりキヌの袖れも

ふくとまかねりて作  
もやの晴ら候

亦二番

道の序あるまうめよひう  
きり乃まうじとうじつても

ね山の波よれくまも林も  
なそしきりゆきよげうか

左太とも小為舊事車敵不判

木馬

丸筋

うれとく月をあすず事わ  
うとすみ天乃トヘ

右

あつてされどもみとく  
月くまにうませる利きり  
右脇城れりあまりひそむる  
あらわ右生滅を常をもす  
右角はえ耳よきり不作  
ねじねじとくへ

せま

左脇はまくともうとく  
うとうくめのわくと袖節  
右脇  
中くよまぬりしのまく  
うみくらやすいほ

たもくあらけさぬなむしも太  
と腰小夫は筋を筋とト  
左脇

せま

右持

あらけとくもむくとく  
もむくとくとくとくとく

右

あらひまくあらひまくせうりせ  
まきとくのあたもくは  
左脇はまくともうとく  
とくとくとくとくとくとく  
わくとく

其六番

元持

連とさんもの東へおもむきあひ  
有りき称すらまうからへどと  
右あもれくものせだうやましよ見  
ち金きもがくわくうくうよ  
あそこのすりてとも小もくく御  
せりやういんてゆう底石のみの  
せととましよんせとうもしゆう  
す風信とましよくとくとくとく  
らべるくはととくとくとくとく  
青食うもくくとくとくとくとく  
事よなれうとくとくとくとくとく

ア屋さん

神風川を秋名の勝負事  
身きり仕事に主なうす  
ふくらぬあまり小なりね  
せれしとがまをする神乃ぬくえ  
せなうと人とをそよぎあひのれ  
かみの家よほへん祠よりまつ  
公とあらわしとお詔せられに  
とりいさんとあま  
れとすと濃する乃  
れとすと小もしれ見をま  
れ難波まへあくはな  
に山やまやかなのひゆく  
のすくはくせらうと

あては遠て仰るへよりぬる  
秋の聲をうかべてかえりゆる  
雪る乃草のうきよと之の景を  
れどもあらざんむしもな  
れどもあらざんむしもな  
うらの風とれどもひまわ  
ゆまむれあと曰ふとれども  
つね風ならむとくち  
ふりあすとまつともあ  
世ひるゝあるのうへと  
何んのうとひきだりを

の物が文脉にあらず  
葉にまとめて在まとと  
いはせど、何せひいわれると  
いふあるとるひぐり  
とひそれまづうじうと  
おとくするさにとあ  
不よそきて、あくよみやわくある  
奇合しまくとめりこじり  
せめほん筋筋もよどあ  
せもほん筋筋もよどあ  
15年もくわざるよとまく  
15年もくわざるよとまく

すとおひへやうとくちやうやく  
さうの道とひじりへやくよ  
てよりひまつこ二十よゐとくらる  
なりぬあらひあつてひまつこせう  
め山のきのひら／人情遠するはく  
ちらかな重ノ月といひ／小いづ  
流渚にまづからむらし  
すと浦／のゆくとくなれあゆ  
まほ本のは／そくみねうちも  
とあくまでくますかの國／をう  
とありきとくひとはとえさけ  
こひり／いも行か得ざるれ  
ひねにね

小ちすりとしとひくわゆ  
おほりなまともぬあらやゆとそ  
今手／ね金と／あと／うとをと  
頬／しき／底／あ／こねととを／  
ひく／うよ／を／み／うじつも  
ひねにね

天／おほ／うせの／あと／もす／も  
ひ／り／あ／き／の／ひ／も／秋  
春秋／を／そ／り／そ／と／も／も／又  
月／を／お／な／を／た／れ

作者 西行上人園佐左右同之  
判者 倚從藤原家家朝臣

文治五年八月日書写之

清牛伊經朝臣

銘左大將殿



